

中
等
習
字
教
科
書

中

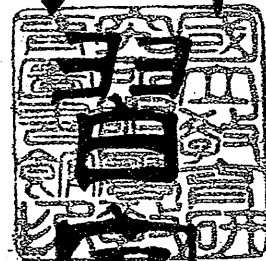
K220.72
19
2

K220.72

19

2

中 等



初 序 教 科 書

緒言

一本書ハ中學及ベコレト同程度ノ諸學校教科用書ニ充ツル目的ヲ以テ編纂セシモノナリ

一本書ノ材料ハ國語及漢文科トノ連絡ヲ保タシメンガ爲メニ古人ノ格言詩歌等ヲ採輯シ練習ノ傍諷誦シテ興味ヲ感セシメ學生ヲシテ倦怠ノ念ナカラシメンコトヲ勉メタリ

一近來中學生ノ文字持ニ細字ノ拙劣ヲ責ムルノ聲到ル處ニ高シ本書ハ夫等ノ弊ヲ救ハンガ爲メニ舊來ノ教科書ニ比シテ練習文字ノ數ヲ多クシ持ニ隔週

二一回細字ノ練習ヲ加ヘタリ教授者ハ生徒ノ自宅又ハ適宜ノ時間ニ於テ之ヲ課シ反復習熟セシメンコトヲ欲ス尙細字ノ速寫ヲ巧ニセンガ爲メニ文稿ノ淨寫ヲ始メ諸答按ノ淨録ニ注意セシメ本書練習材料ノ外他ノ教科書等ヨリ適宜ノ材料ヲ採リ本書ノ書風ヲ學ビテ習熟セシメンコトヲ望ム

一本書ハ中學校教授細目ニ準據シテ上中二卷ヲ楷行トシ下卷ヲ行草ニ体トシ毎回課スルニ左右二頁ヲ以テシ隔週毎ニ淨書セシムルモノトス

編者識

惜花春起早

中一

愛月夜眠遲。

書ハ松根ニ就テ讀ミ

中二

琴ハ石上ニ來リテ彈ス。

身體髮膚受之父母，不敢毀傷，孝之始也。立身

中三

行道揚名於後世，以顯父母，孝之終也。

孝經

鷄聲茅店月

中四

人跡板橋霜。

小なる事は分別せよ

中五

大なる事は驚くからず。

すべて、勝地佳境に遊びて、見聞すること
は、一時の耳目を悦ばしむるはさらなり、

幾年経ても、その時の有様思ひ出でられて、
たのしみきはまりなきものなり。 樂訓

芳草漁家路

斜陽水寺鐘。

水深クシテ魚樂ヲ極メ

中
八

林茂リテ鳥歸ルヲ知ル。

富士山

石川丈山

仙客來遊雲外巔
神龍栖

中九

老洞中淵雪如紈
素烟如柄白扇倒懸東海天。

幼則束以禮讓

中十

長則教以詩書。

一世の上に逍遙し

中十一

天地の間に睥睨す。

中江藤樹先生は、俗稱を典右衛門といひ、江州大
溝在なる小川村の百姓の家に生れたり、學王

陽の流を汲みて、その徳行、誠に一世に秀で、遠
近皆その風を望まざるはなかりきと云ふ。

居身百尺樓上

中十三

放眼萬卷書中。

天理ヲ明カニシテ人ノ心ヲ正クシ

中十四

三綱ヲ扶ケテ九法ヲ叙ス。

山櫻爭發、濃淡綺錯、其高者帶長松之
翠、低者倒影清流、紅綠相映、粧點成趣、

譬猶天生佳人、衆美皆具、而飭之以脂
粉、宜古今艷稱、以為一名區也。

伏久者飛必高

中十六

開先者謝獨早。

輕雲素月を拂ひ

中十七

清泉踈松に映す。

旅路の朝夕

露も草葉を、鞋に、あは、袖よく風は、
汗をぞ拭ふたひぢの愉快は、野路ゆく朝

追風に帆かけると、まゝを追へば、わがため
波は、歌をぞ歌ふたひぢの愉快は、海ゆく夕。

靜處光陰最好

中十九

閑中氣味偏長。

人生の勝踐を極め

中二十

林野の奇趣を得たり。

其後愈沛勇猛消老之由奉賀候陳者
少生懇志之人鈴木才藏事拜面仕度申出候間

中
共
一

差出候即逢可被下候

十月十日

山岡鐵太郎

杉浦直三郎左衛門様

花落家僮未掃

中
廿二

鳥啼山客猶眠。

清白之心を懐き

中
六三

忠正之道を行ふ。

東京市神田區錦町三丁目
七拾貳番屋敷

春野芳太郎殿

親展

中北四

織

明治四十年七月十三日

大坂市東區今橋三丁目五番地

秋山朗之助

V220:7

明治丙午寒露後二日

愛石玉木享書



中 廿五

不許複製

明治三十九年十一月十日印刷
明治三十九年十一月十五日發行

編書者 玉木本三郎
大阪府南區安堂寺橋通四丁目百五十八番屋敷
發行所 松村九兵衛
大阪府東區備後町四丁目七十八番屋敷
發行者 吉岡平助

發行所 繁本龜治
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
賣捌所 吉川弘文館
東京市京橋區北旗町二番地
同 篠崎參文舍

上中下
各册
定價 金貳拾錢

